

物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について、より考えを深めることができる児童の育成 ～教育活動全体とつながりながら行う道德教育を通じて～

小牧市立米野小学校 戸田 昭宏

1 はじめに

「環境が人の心を育てる。だから、教育活動全体を通じて道德教育を行う必要があるのだ」。これは、私が道德教育をする上で、最も大切にしている考えである。児童の人格が形成されていく上で1番大きな影響を与えるものは家庭環境である。その次に大きな影響を与えているのは、多くの時間を過ごす学校生活だろう。だから、道德教育をする上で、大切なことは、「教育活動全体を通じて道德教育を行う」ということをどれだけ具現化できるかであると考えている。私は、これまでも、道德を単発的な授業で終わるのではなく、道德の時間を要として、他の教育活動と関連させながら、道德的諸価値を補充・深化・統合し、道德性を高めていく実践をしてきた。令和3年度11月中部地区小学校道德教育研究大会静岡大会で発表させていただいた実践では、特別活動、学校行事等、様々な方面から働きかけることによって、目指す児童像に近づけることができた。その一方で、課題も明らかになった。「他の教育活動と絡める場合、学級、学年だけでなく、学校全体の動きとも関係する分、事前の調整が不可欠となる」、「単元の入替え、学年間や分掌間の調整が必須となる」、「職員間の共通理解がとても重要である」、さらには、「単元によっては長期の取り組みとなったことで、児童の学びへの動機付けが続かない場面も見られたこと」も大きな課題と感じた。令和4年度からは、「教育活動全体から育てる道德教育」という考えは継続しながら、前述の課題を少しでも解消できないかとの思いから本テーマを設定し、研究実践に取り組んだ。

2 研究の構想

(1) 目指す児童像と研究の仮説

目指す児童像

物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について、より考えを深めることができる児童

仮説1

単元全体に関わるテーマを設定した上で、絡める教科、特別活動、行事などを精選し、単元全体を最大10時間程度の小規模の構成（パッケージ型小単元）とし、より短期間で柔軟な実践をすることで、児童の考えがより深まるであろう。

仮説2

道德の授業を中心に据え、児童の主体的な話し合いを生み出すための発問の工夫、ポートフォリオを活用した振り返りの実施などの授業の工夫に努めることで、児童は物事をさらに多面的・多角的に考え、自己の生き方について、より考えを深めることができるであろう。

(2) 具体的な手立て

【仮説 1 に対する手だて】

道徳の授業と他の教育活動を関連させた短期的なパッケージ型小単元の工夫

(ア) 道徳の授業のねらいと関連した教育活動の精選、授業を行うタイミング

(イ) 展開の工夫（家庭地域・外部講師との連携）

【仮説 2 に対する手だて】

ねらいに迫る道徳の授業の工夫

(ウ) ねらいに迫る発問の工夫

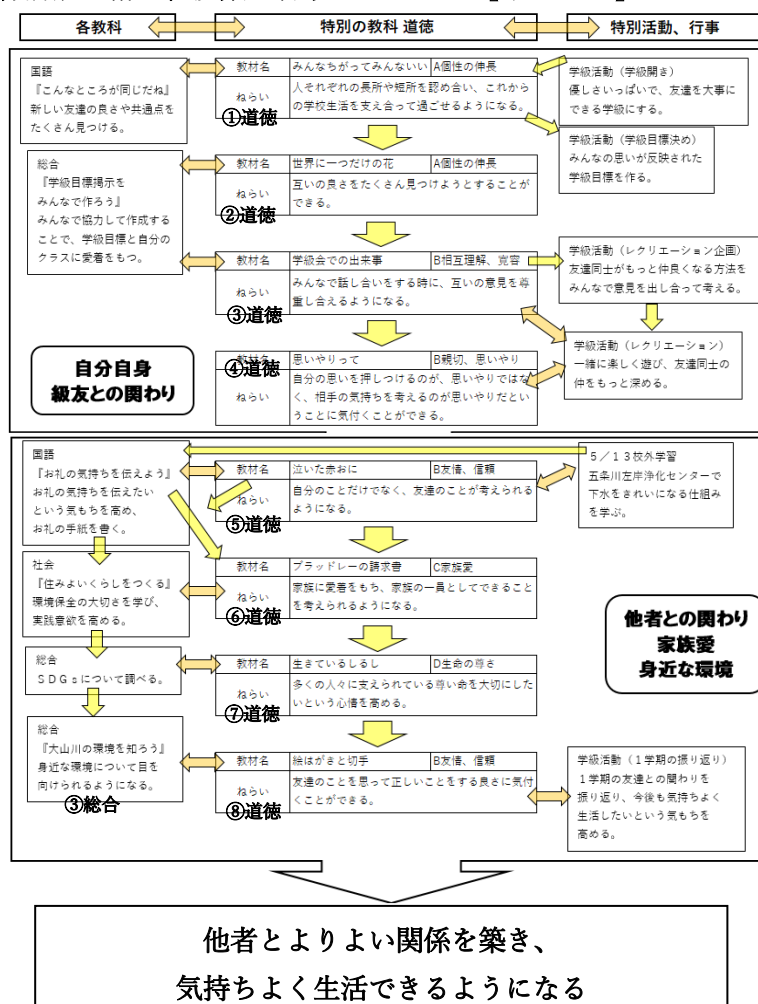
(エ) 振り返りの蓄積・充実させるためのポートフォリオの活用

3 研究の実際

(1) 道徳の授業のねらいと関連した教育活動の精選、授業を行うタイミング【手だてア】

単元を貫く大きな目標を設定した上で、連続するパッケージ型小単元を構想した。その際、絡める取組との関連をより明確にすることを意識した【資料 1】。

学年の 1 学期の目標を「他者とよりよい関係を築き、気持ちよく生活できるようになる」と設定した。1 学期前半は、学級の中での自分の居場所づくりや、身近な級友との関係づくりが大切であると考え、要となる道徳の授業では、「A 個性の伸長」「B 相互理解、寛容、親切、思いやり」を配置した。1 学期後半は、級友との関わりだけでなく、さらに身の周りにいる他者へと関係を広げていくために、「C 家族愛」「D 生命の尊さ」を配置した。また、それらの道徳的諸価値に関係する、各教科や特別活動、行事を相互に関連づけながら、道徳教育を行った。



【資料 1 連続するパッケージ型小単元】

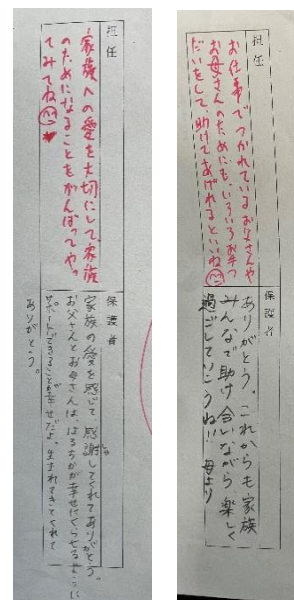
1 学期の目標「他者とよりよい関係を築き、気持ちよく生活できるようになる」に、よりせまるためには、人それぞれの長所や短所を認め合えることが大切だと考え、①道徳は、「みんなちがってみんないい」という資料を用いて行った。本来は 3 学期に計画されているものを 1 学期の最初に

行うことで、まだ出会って間もない友達の得意なことや苦手なことを知るよいきっかけになった。その後の学級活動で決めた学級目標は、「みんなちがってみんないい」という意見がつまった「カラフル」に決まった。「みんなそれぞれが違う良いところ（色）をもっていて、それが認め合えるクラスになってほしい」という意見にみんなも同調している様子がうかがえた。

(2) 展開の工夫（家庭との連携）【手だてイ】

『⑥道徳 資料名 ブラッドレーの請求書』

この資料は、自分がした手伝いに対する請求書を母に渡したブラッドレーと、ブラッドレーに1ドルも請求しなかった母の姿を通して、家族の一員としての自分について考えさせ、敬愛の念をもち、家族のために積極的に関わろうとする実践意欲と態度を育てることがねらいである。児童が身に付けさせたい道徳的心情を育んでいくために、家庭はとても大切な場所である。道徳的価値（家族愛）を高めるために本授業では、【資料2】のように、振り返りシートに保護者のコメント欄を設けた。家族からの温かい言葉をもらった後に、感想を聞くと、「家族のためにがんばりたい」という主旨の発言が多くあったので、ねらいに迫ることができたと考えられる。これは、キャリアパスポートに入れて保存することで、学年を重ねても、家族の愛を振り返ることができるように配慮した。



【資料2 保護者コメント】

(3) ねらいに迫る発問の工夫【手だてウ】

『⑥道徳 資料名 ブラッドレーの請求書』

主発問として『ブラッドレーが「おかあさん、ごめんなさい」と言った後にどんなことを言ったと思いますか』という発問をした。その際、教師をお母さんに見立てた役割演技を取り入れることで、多面的・多角的に考え、ねらいに迫るようにした。児童の演技後に、「どうしてそう思ったの」と問いかけたり、演技を見た児童に「どう思った」と感想を聞いたりする補助発問を適宜取り入れた。【写真1】や【写真2】の吹きだしの外に付け足して書いてある言葉が、補助発問による児童の反応である。補助発問をすることで、児童の考えが徐々に深まっていき、「いつもありがとう」という回答



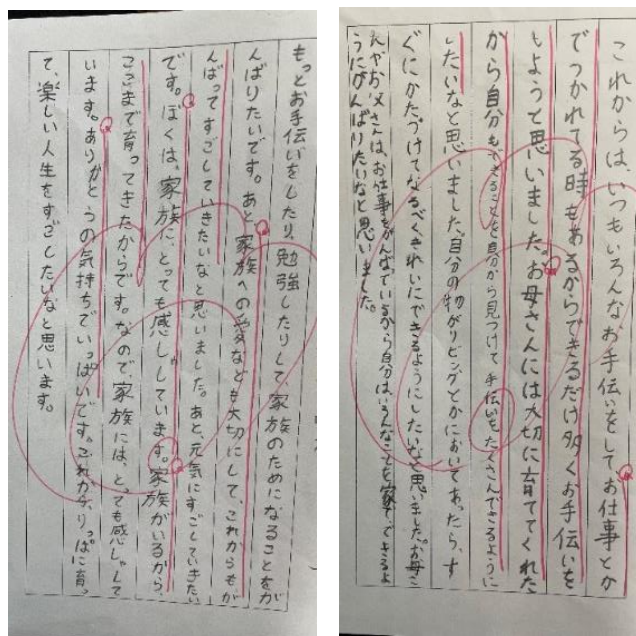
【写真1 主発問に対する児童の反応】

に対する補助発問の回答では、「大事に育ててくれたから」という母親への感謝の気持ちもうかがえるようになった。主発問の後に、より家族愛に関する道徳的価値を深めるために「ブラッドレーが謝った後、お母さんはブラッドレーにどんなことを言ったと思いますか」という深化発問をした。児童の回答に補助発問をしていくと「愛されているから」「ブラッドレーのことを大切にしているから」という反応が得られた。こうした工夫により、最後の「家族の一員としてできることを考え

よう」の発問では、「これから手伝いをしていきたい」だけの回答に終わらず、【資料3】のように、「お母さんは大切に育ててくれた」、「家族にとっても感しゃしています。家族がいるからここまで育ってきたからです。」などといった言葉のように、多くの児童が家族の愛を感じ、感謝の気持ちをもつことができた。補助発問をすることで、物事を多面的・多角的に考えることができ、ねらいである「家族のために積極的に関わろうとする実践意欲と態度」を大いに高めることができたと考えられる。



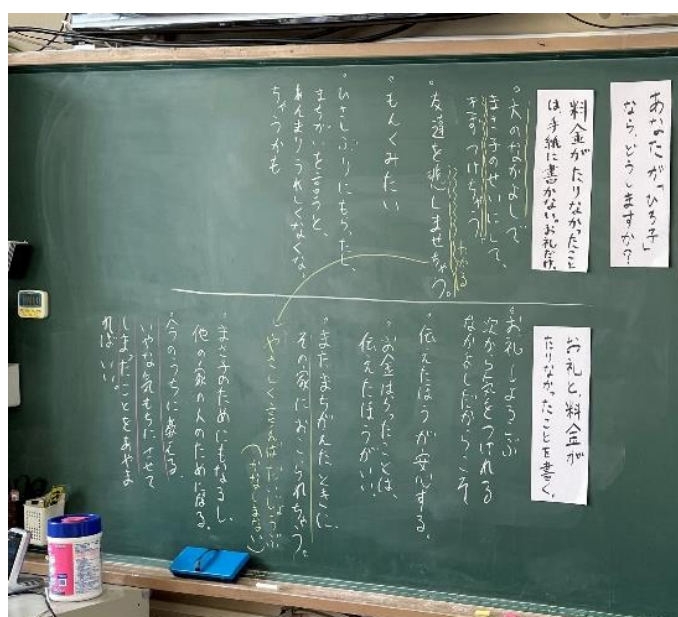
【写真2 深化発問に対する児童の反応】



【資料3 家族の一員としてできること】

『⑧道徳 資料名 絵はがきと切手』

この資料は、料金不足のはがきを送ってきた友達に対し、そのことを伝えるかどうかを悩むひろ子の姿を通して、友達を大切にすることについて考えさせ、友達のことをよく理解し、信頼し、助け合おうとする力を育てることがねらいである。資料には、最後に料金不足を知らせる決断をしたところが描かれているが、それが道徳的によい価値観という先入観をもつことがないように、結末を読む前に行うモラルジレンマ授業を行った。その結果、【写真3】の板書ののように、多面的・多角的な視点で考え、議論する場が生まれた。児童は、友達のことを考えての行動は、どちらもよい価値であり、友達を大切にすることにつながるということに気付くことができた。



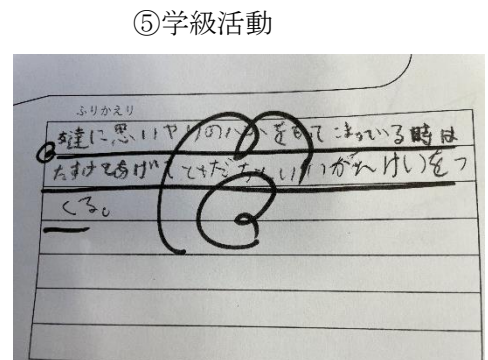
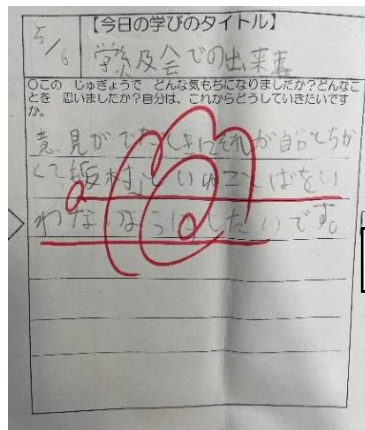
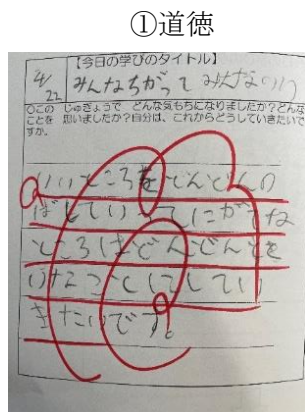
【写真3 ⑧道徳の板書】

(4) 振り返りの蓄積・充実させるためのポートフォリオの活用【手だてエ】

一学期は、連続したパッケージ型小単元の中で8時間の道徳を行った。ポートフォリオ形式を活用してその都度振り返りを行った。2人の児童の振り返りを追い、認められた変容について紹介する。

ア 児童A

③道徳

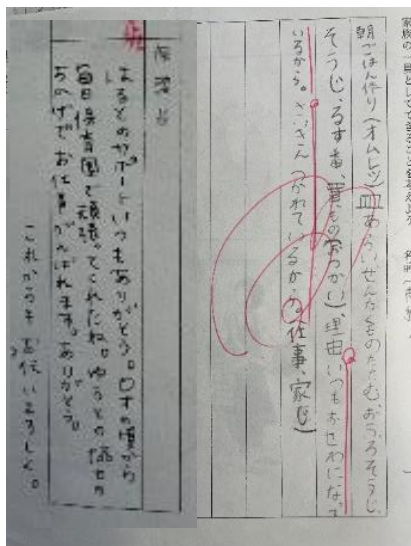


【資料4 児童の振り返り】

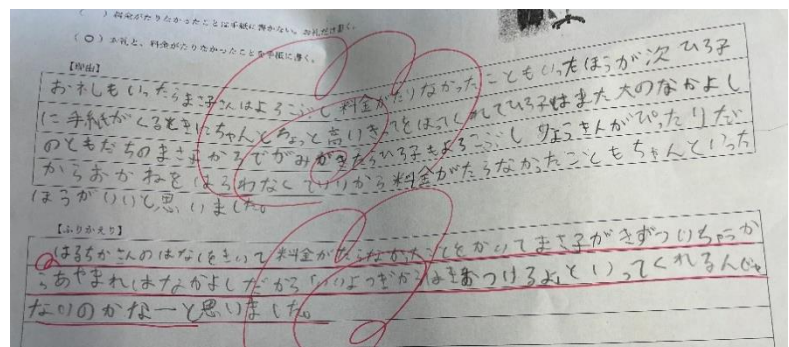
本児童は、感情があまり表に出ず、感じたことをうまく表現することが苦手である。振り返りに記入する文章も少なく、一文で終えてしまっていた。【資料4】

それが⑥道徳の授業で保護者からのメッセージ受け取った後から大きな変容が認められた。

⑥道徳



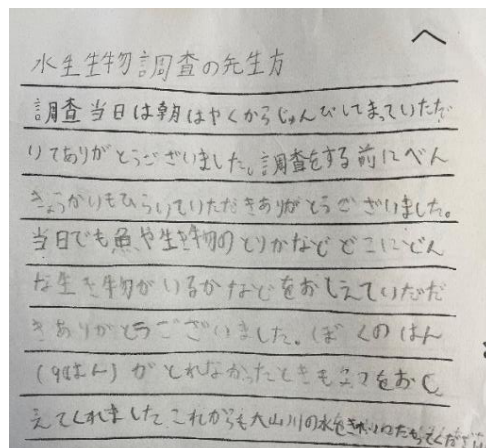
⑧道徳



【資料5 児童の振り返り】

⑥道徳を境に自分の思いをうまく表現することができるようになってきた。振り返りを積み重ねることに慣れてきているということもあるだろうが、兄弟の世話に感謝しているという保護者の方の温かい励ましが、本人の自信につながったとも感じる。【資料5】

③総合の「大山川の環境を知ろう」の活動後のお礼の手紙では、「朝早くから準備をして、待っていただきありがとうございました。」などと、本人が目にしたわけではない、外部講師の方々の早朝の準備についてのお礼まで書くことができるようになっている。【資料6】「自分自身、級友との関わり」から、「他者との関わり、家族愛、身近な環境」へと視野を広げ、「家族の励まし」や、「外部講師の方との関わり」を経験していく中で、大きな成長になったと考えられる。

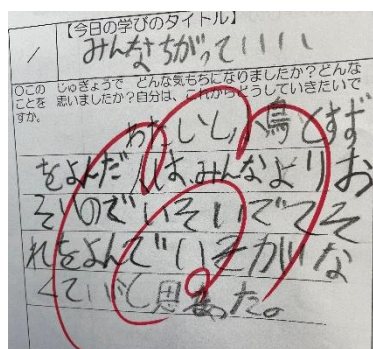


【資料6 ③総合のお礼の手紙】

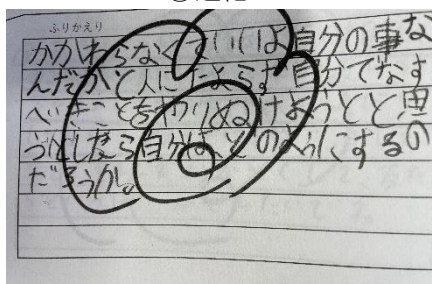
イ 児童B

本児童は、低学年の頃は、教室を飛び出し、校内を徘徊するなどの不適応行動をよく起こしていた。4年生になっても、頻繁に暴言を吐いたり、気に入らないことがあると暴れたりすることがあり、友達との関わりも苦手になっていた。

①道徳



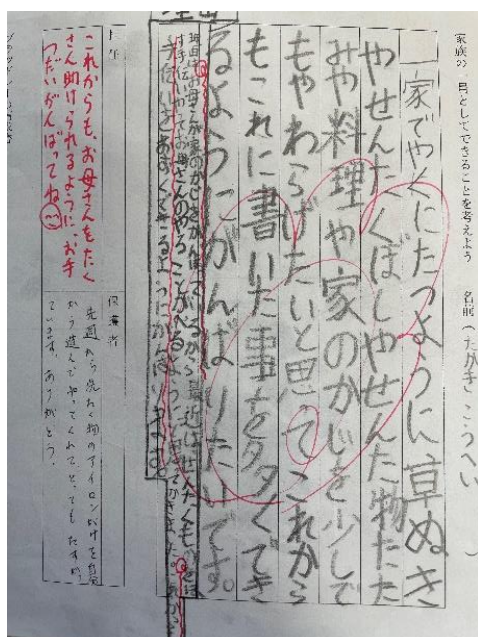
⑤道徳



①道徳、⑤道徳の振り返りからは、登場人物の立場で考えることや、自分の立場で考えることが非常に苦手なことが分かる。

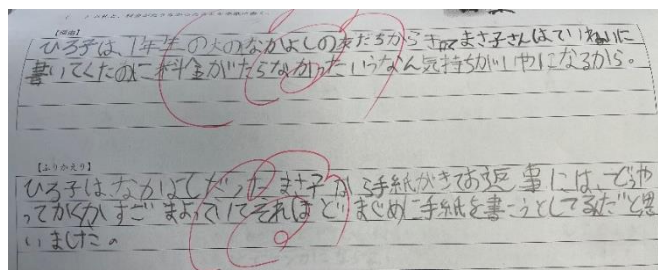
【資料7】

【資料7 児童の振り返り】



【資料8 ⑥道徳】

しかし、⑥道徳【資料8】を見ると、「一家でやくにたつように草ぬきやせんたくぼしやせんたく物たたみや料理や家のかじを少しでもやわらげたいと思います。」などと、家族のためにがんばりたい気持ちや、その理由について具体的に記述することができている。家族の願いも知ることが良いきっかけにもなり、その後の⑧道徳では、「ひろ子は～すぐくまよっていてそれほどまじめに手紙を書こうと～」という言葉から、他の人の気持ちを真剣に考えようとする姿勢が見られるようになった。【資料9】



【資料9 ⑧道徳】

学期始めに見受けられた不適応行動も徐々に減った。本児童が学級に居場所を見つけたこと、さらには、本児童の個性を周囲も認める雰囲気が広がってきたことが大きな変容とを感じる。

4 研究の分析と考察

【手だてア】に基づき、「自分自身、級友との関わり」から「他者との関わり、家族愛、身近な環境」と広げていく、小単元と小単元を組み合わせた連続するパッケージ型小単元を実践した。学校だけでなく、家庭、外部講師など学校外の方との関わりを設けることで、大きな変容をする児童も見られた。学年の目標を設定した上で、小単元パッケージを作成することで、より児童の考えが深まり、身に付けさせたい道德性を向上させることができたと考える。

【手だてア】に基づき、小単元パッケージを計画し、【手だてイ】に基づき、展開を工夫し、【手だてウ】のように考えがより深まるように発問を工夫し、【手だてエ】のように、振り返りを蓄積し、評価していくことで、身につけさせたい道德性の向上につなげることができたと考える。これらのことから、仮説1、仮説2は、充分検証できたものとする。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・ 単元全体に関わるテーマを設定した上で、絡める教科、特別活動、行事などを精選し、小単元パッケージを組み、柔軟な実践をすることで、児童の考えをより深めることができた。
- ・ 道德の授業を中心に据え、児童の主体的な話し合いを生み出すための発問の工夫、ポートフォリオを活用した振り返りの実施などの授業の工夫に努めることで、物事を多面的・多角的に考え、道德的諸価値について、より考えを深めることができた。
- ・ 物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方について、考えをより深めることができる児童が増えた。
- ・ 他者とよりよい関係を築くことができる児童が多い学級になった。

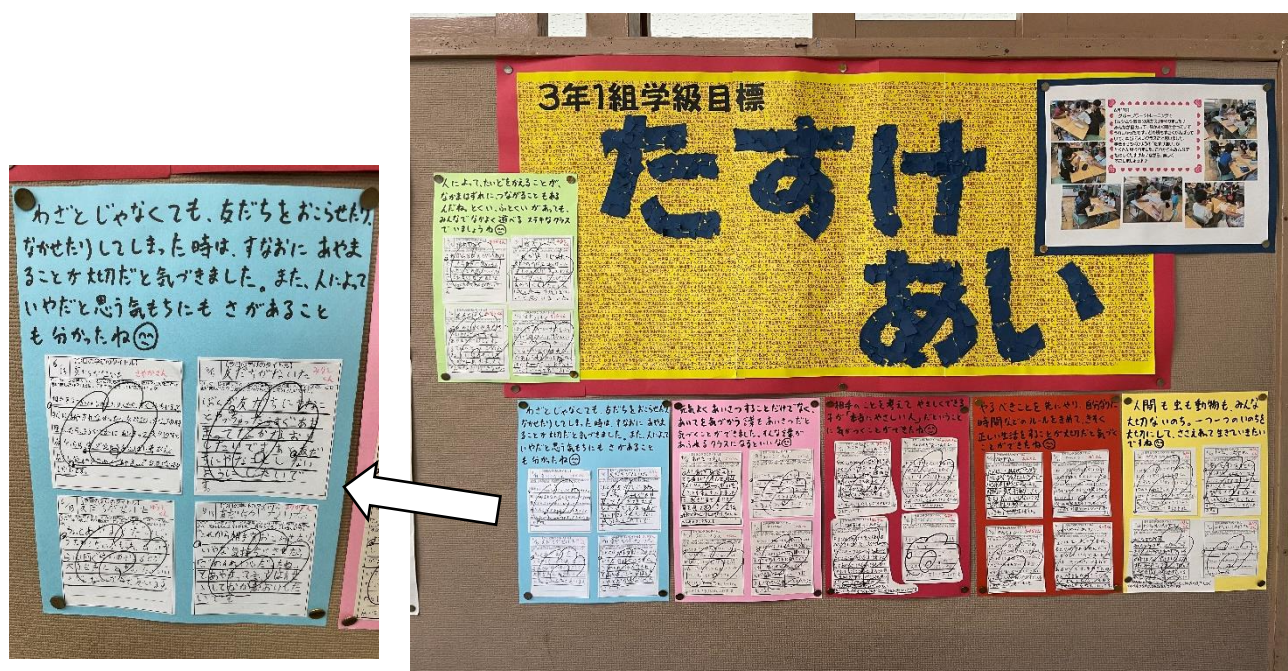
(2) 課題

- ・ 他教科、特別活動、行事と絡めたときの、振り返りの蓄積の仕方で工夫が必要である。(1枚ポートフォリオで振り返りをさせるときと、ちがう振り返りシートを使うときの振り返りの蓄積に気を遣った。)
- ・ 単元の入れ替えを行った上での実践が、効果的であったかの検証が必要である。今回は、お礼の手紙を書く活動に絡めたいとの考えから、本来3学期の「内容項目B感謝」の道德の授業を、1学期に実施した。本来は卒業生に向けた感謝の気持ちを高める機会でもあったことを考えると、教材のもつ価値を最大限生かすことができたかという疑問が残る。安易に入れ替えたり関連づけたりするのではなく、効果を検討し、成長に一番効果が期待できるタイミングを図ることが大切である。

6 おわりに

本研究を通して、教育活動全体とつながりを持たせながら道徳教育を行っていくことの大切さを実感することができた。本研究の成果を生かし、私は今年度も同様なパッケージ型小単元を作成し、教育活動全体とつながりながら行う道徳を実践している。今年度は、さらに道徳的实践力を向上させるための手だてとして、「道徳教育の見える化」の実践をしている。【写真4】のように、「道徳の授業の振り返り」と「学級目標」と「教師の願い」を相互に関連させるように掲示した。これは、非常に効果的だと感じている。これまで10年間経験してきた様々な学級の中で、今年度が一番ケンカなどのもめ事が少ないのである。これは、正しい道徳的価値観が育ち、道徳的实践力が向上していると言えるのではないだろうか。実際に、学級全体の友達との関わり方の尺度を見るQJテストでも、「親和的なまとまりのある学級集団」という評価が得られ、学級経営も安定してきている。

はじめにも述べたが、私は「環境が人の心を育てる」と考えている。親が子どもに「健やかな心を育んでほしい」と願うように、私もその願いを常にもち、その環境を作っていきたい。そのためにも、「児童に愛情をたっぷり注ぎ、健やかな心を育てたい」その思いを忘れずに、今後も道徳教育の実践を積み重ねていきたいと思う。その気持ちが、教育活動全体を通じた最高の道徳教育になることを信じて。



【写真4 道徳の振り返りの掲示物】

参考文献

- ・ 山田貞二「道徳科を要としたカリキュラム・マネジメントの推進に関する実践研究～小单元構
想を中心として～」『日本道徳教育学会 第98回大会』2021年11月